

特273

549

マルクス著
堀利彦譯

労働と資本

(價十五錢)

無産社パンフレット(2)



始



時273
549

—(次 目)—

(一) 労働賃金とは何か……………一

(二) 商品の価格は何で極まるか……………七

(三) 賃金は何で極るか……………一五

(四) 資本の性質と其の成長……………二五

(五) 賃金労働と資本との関係……………三〇

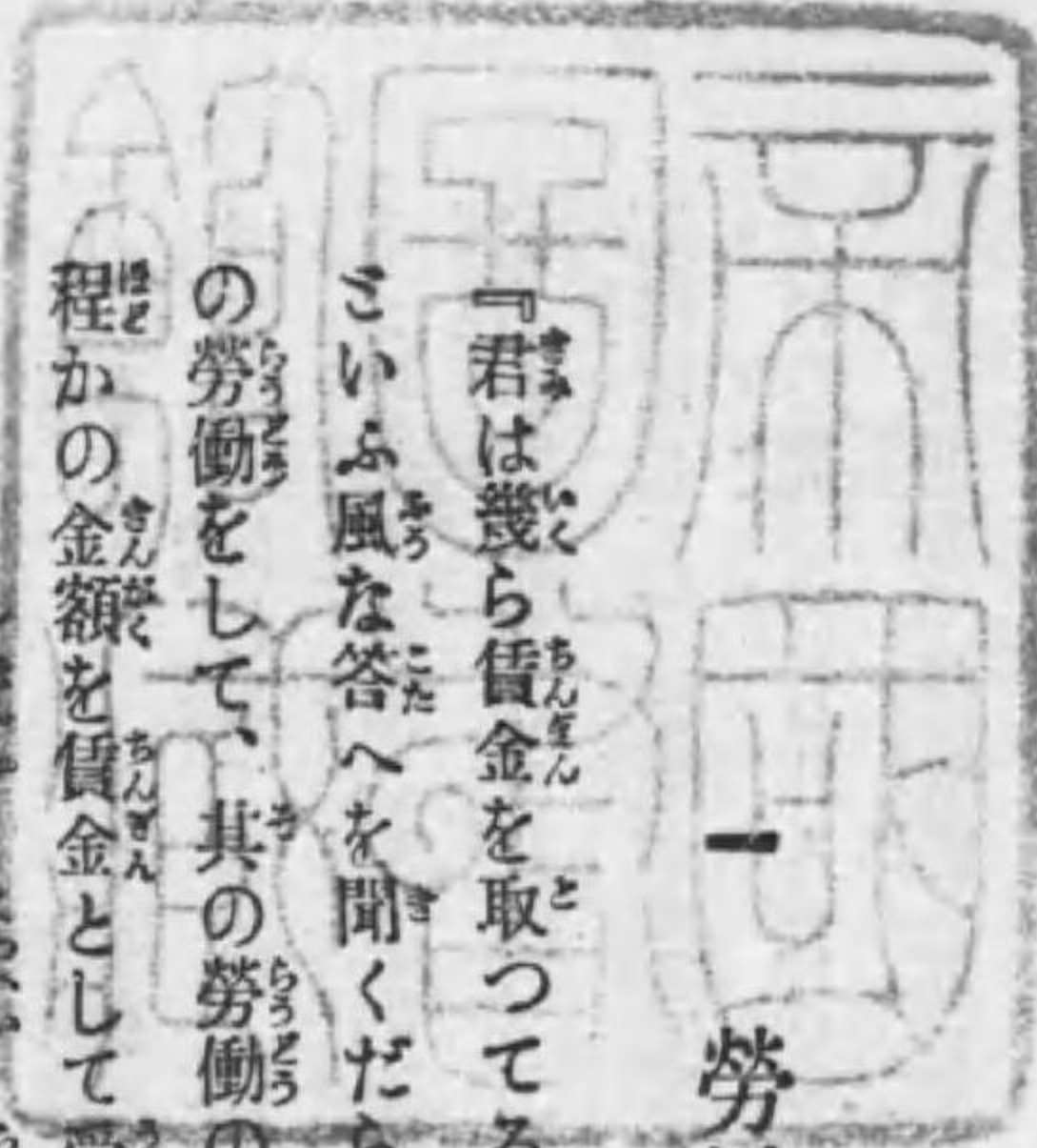
(六) 賃金と利潤との関係……………三七

(七) 資本と労働との利害は正反對……………三三

(八) 資本家仲間の競争の影響……………三六

労働と資本

マルクス著
堺利彦譯



一 労働賃金とは何か

「君は幾ら賃金を取つてゐるか」と労働者に問ふなら、「僕は一日二圓だ」「僕は二圓五十銭だ」
 さいふ風な答へを聞くだらう。労働者の働く仕事は色々に違つてゐるが、兎にかく彼等は何
 の労働をして、其の労働の何程かの時間、或は何程かの分量に對し、雇ひ主たる資本家から何
 程かの金額を賃金として受取つてゐるのである。

だから資本家は貨幣で労働者の労働を買ひ、労働者は其の貨幣に對して労働を資本家に賣
 てゐるように見える。けれども、それは間違ひだ。労働者が資本家に賣るのは、労働その者で

15. 3. 13
内交

はなく、労働力（即ち労働する力）である。資本家は其の労働力を、一日分、一週間分、一月分といふようにして買ふのである。そして資本家は其の労働力を買った後、労働者に約束の時間だけ労働させて、其の労働力を消費する。それは丁度、砂糖を買つた後、それを嘗め盡して消費するのと同じ事である。資本家は二圓なら二圓の金で砂糖屋の砂糖を買ふ事も出来るし、労働者の労働力を買ふ事も出来る。そこで假りに二圓の金で五斤の砂糖が買へ、又十二時間の労働力が買へるとすれば、二圓は即ち砂糖五斤の価格であり、又労働力十二時間の価格である。斯様にして、砂糖が商品であると同じく、労働力も商品である。只砂糖は目方で計られ、労働力は時間で計られるだけの違ひだ。

右の通り、労働者は自分の商品たる労働力を、資本家の商品たる貨幣と交換する。（貨幣も一つの商品である。）例へば、労働力十二時間分の使用に對して二圓といふ取引である。然るに其の二圓といふ貨幣は、實は、二圓で買へるだけの他の品物を代表してゐるに過ぎない。だから、労働力が二圓の貨幣と交換されるといふ事は、即ち二圓だけの値打のある他の色々な商品と交換される事である。従つて資本家が労働者の一日の仕事に對して二圓の賃金を拂ふのは

即ち其の労働者に若干の米、若干の野菜と肉、若干の衣服、若干の炭薪を與へるわけである。故に其の二圓の金は、労働力が他の諸商品と交換される割合、即ち労働力の交換価値を示すものである。そして商品の交換価値が斯様に貨幣で示された時、それを價格と云ふ。だから労働賃金はツマリ労働力の價格に過ぎない。世間では普通にこれを労働の價格と云ふけれども、それは間違ひで、實は人間の血と肉との中に盛られてある、労働力といふ一種特別な商品の價格である。

試みに一つ織工の實例を擧げて見る。資本家が織工を雇つて、それに機と糸とを當てがふ。織工は其の機を使つて労働し、その結果、糸が織物になる。資本家は其の織物を取つて二十圓に賣るとする。此の場合、織工の賃金は、自分の作りあげた織物、若しくは其の賣上金たる二十圓の分前であるかと云ふに、決してそうではない。織工は織物の賣れないズツト以前に賃金を受取つてゐる。資本家は織物の賣上金の中から賃金を拂ふのでなく、以前から持つてゐた貨幣の中から拂ふのである。資本家は織物を賣つて大いにモウける事もあり、損をする事もある。けれどもそれは織工に何等の關係もない。資本家は元來、糸や機を買入れると同じように、勞

動力を賣入れたのである。そして其の自分の所有する原料(即ち糸)と、労働用具(即ち機と織工)とを使つて、織物を生産するのである。織工は此の場合、機と同じ労働用具である。織工が生産物たる織物の分前にあづからないのは、機がそれにあづからないと同じわけである。

故に労働賃金なるものは、労働者が自分の生産する商品に對して受ける所の分前ではない。それは只資本家が労働力買入の爲に兼て用意してゐた所の貨幣の一部である。

そこで要するに、労働力は其の所有者たる賃金労働者が資本家に賣る所の商品である。然し労働者はナゼそれを賣るのか。賣らなければ生きて行かれないからである。

尤も、労働力を働かす事(即ち労働)は、労働者自身の生命の活動である。然るに彼は其の生命の活動を、自分の生活資料を得る爲に、他人に賣るのである。だから彼れの生命の活動は、彼に取つては、只生存の爲の一段に過ぎない。彼は只生きんが爲に労働するのである。労働その者は、彼自身の生活でなく、寧ろ生活の犠牲である。従つて彼れの活動の産物は其の活動の目的でない。彼が自分の爲に生産するのは、其の織る所の絹布でもなく、其の採掘する所の金塊でもなく、其の建築する所の宮殿でもない。彼が自分の爲に生産するのは、一に只賃金で

ある。だから其の絹布や金塊や宮殿が、彼に取つては、木棉の着物に變り、銅貨に變り、棟割長屋に變るわけである。種々の労働者が一日十二時間も、或は織り、或は紡ぎ、或は掘り、或は運び、或はロクロを廻し、或はシャベルを使ひ、或は家を建て、或は車を押し、様々な労働をするのは、それは彼れの生活でなく、彼れの本當の生活は、それらの労働が済んで後、食卓に於いて、居酒屋に於いて、寐床に於いて、初めて開始されるのである。彼れの十二時間の仕事は只、彼をして食卓に向かはしめ、居酒屋に入らしめ、寐床に身を横たへしめる爲にのみ意味があるので、織つたり、紡いだり、掘つたり、運んだりする仕事その者は、彼に取つて何んの意味もないのである。

然し労働力は昔から商品であつたのではない。労働は昔から賃金労働であつたのではない。随分古い昔から人間の多数は、或は奴隸となり、或は農奴となつてゐたが、それらは今の賃金労働とは違ふ。奴隸は自分の労働力を主人に賣つたのではなく、労働力と一緒に體ご主人に賣切りにしたのである。彼は其の全身を一の主人から他の主人に譲り渡される商品であつた。即ち彼は正に牛馬と同様であつた。次に農奴は土地に附屬し、其の土地の領主に向かつて收穫

を納めるものである。即ち彼は領主から賃金を受け取るのではなく、領主の方が彼から年貢を取り立てるのである。然るに今日の謂ゆる自由労働者は、自分自身を切賣りにする。彼は毎日、自分の生命の何時間分かを資本家に賣り渡す。労働者の體は奴隸とは違つて何人の所有にも屬せず、又農奴とは違つて土地にも附屬してゐないが、其の代り、日々の生命の八時間分、十時間分、十二時間分、甚だしきは十五時間分が、それを買取つた人の所有に屬する。尤も労働者は自分が厭と思へば、何ん時でも雇主の處を去る事が出来る。又資本家は、自分の都合次第で、何ん時でも労働者を解雇する。そこが自由労働者と呼ばれる以所である。然し労働者の所得の唯一の源は、労働體力の賣却にあるのだから、彼が生きてゐたいと思ふ以上、其の労働力の買手たる資本家の階級と全く縁を切るわけに行かない。彼は甲さか乙とか丙とか丁とかいふ、特定の資本家には隸屬してゐないが、資本家階級の全體に隸屬してゐる。だから労働者は矢張り一種の奴隸、即ち賃金奴隸である。

扱これから進んで、更に資本と労働との關係を委しく話すのだが、それには先づ、賃金の額が何で極まるかを考へて見ねばならぬ。所が、賃金は(前に云ふ通り)労働力といふ商品の價格である。そこで労働力の價格が何で極まるかを考へるには、先づ一般の商品の價格が何で極まるかを考へる必要がある。

二 商品の價格は何で極まるか

凡そ商品の價格は何に依つて決定されるか。

買手と賣手との間に生ずる競争、即ち需要と供給との關係に依つて決定される。そして其の競争に三つの種類がある。

第一は賣手の間の競争。彼等は皆同じ商品を賣らうとする。そして成るだけ多くそれを賣らうとする。出来るなら他の賣手を排斥して自分ひとりで賣らうとする。従つて銘々が他よりも安く賣らうとする。斯くて賣手の間に競争が起り、其の爲に商品の價格が下落する。

第二は買手の間の競争。これも競争の有様は同じ事で、其の結果は價格の騰貴となる。

第三は買手と賣手との競争。買手は出来るだけ安く買はうとし、賣手は出来るだけ高く賣らうとする。そして此の競争は、買手仲間の競争と、賣手仲間の競争と、どちらが烈しいかに依つて勝負が極まる。

例へば、或る市場に百捆の棉花があつて、同時に千捆の棉花に對する買手があるとする。此の場合、需要は供給より十倍だけ大きい。だから買手の間の競争は非常に烈しい。そこで或る買手は餘ほど高い値段をつけて、他の買手を排斥しようとする。然るに賣手の方では、敵の陣営内に烈しい競争があつて、どうせ百捆の棉花は全部賣れるに極まつてゐるに確信するから、味方の陣営内で下手な競争をやつてはならぬと考へる。そこで賣手の陣営内には俄に平和が來る。そして皆が申合せて、腕を拱ぬいて買手の陣営に對立し、飽くまで價格のせりあげを要求する。

つまり商品の供給が需要に比べて少い時には、賣手側の競争は甚だ軽くなり、或は全く無くなる。そして買手側の競争がそれと同じ割合で増加する。其の結果は、大なり小なり價格の騰貴となる。

又これと反對の場合が甚だ多い。即ち供給の大超過が生ずると、賣手側に死にもの狂ひの競争が起り、それでも買手がサツパリ無く、結局、滑稽なほどの安値で投賣をする事になる。然し、價格の騰貴とか何か。下落とは何か。價格が高いとか低いとかいふのは、一體何を標

準にするか。一粒の砂も顕微鏡で見れば高く、五重の塔も、山に比べると低い。價格は需要と供給の關係に依つて決定されるとして、その需要と供給の關係は何に依つて決定されるか。

試みに誰でもいゝから、出あひがしらの實業家に聞いて見よ。何の躊躇する所なく斯う答へるだらう。「私が商品の生産に百圓を費し、そして其の商品を賣つて百十圓を得るなら、それは正常な利潤である。然るに若し私が百二十圓乃至百三十圓を得るなら、それは可なり高い利潤である。若し又二百圓を得るような事があるなら、それは異常な利潤と云はねばならぬ。」然らば此の實業家に取つて、利潤の標準となるものは何か。外でもない、商品の生産費である。彼は自分の商品の交換價值が、その生産費以上であるか以下であるかに依つて、利潤の上り下り(即ち損得)を勘定するのである。

前に云ふ通り、價格は需要供給の變動につれて、或は騰貴し、或は下落する。然るに今或る商品の價格が、供給の不足の爲、若しくは需要激増の爲、著しく騰貴したとするならば、他の商品の價格はそれに比例して下落した事になる。なぜいふに、商品の價格といふものは、其の商品を他の商品と交換する時、他の商品を何ほご受取る事が出来るかといふ其の割合を、

貨幣で云ひあらはしたに過ぎないものである。例へば絹布一反の價格が十圓から十二圓に騰貴すれば、金の價格は絹布に對して下落したわけであり、又他の商品も同じく絹布に對して下落したわけである。假りに米五斗が十圓であるとなれば、従來は米五斗と絹布一反と交換する事が出来たのだが、今は米六斗で絹布一反に當る事になるのだから、米の價格は下落したわけである。所が或る商品の價格が騰貴すると、あの商品を作れば大いにモウかると云ふので、多くの資本が其の商品の生産に向かつてドンドン流れこむ事になる。そして今度は、其の商品の供給が多過ぎて、價格が下落し、もはや普通の利潤しか得られない事になり、或は其の生産費以下に沈む事になる。

然るに、商品の價格が其の生産費以下に下落すれば、誰もいつまで損の行く商賣を續けるものはないのだから、今度は多くの資本が其の商品の生産から引きあげられる。そして特別の場合を除く外、其の商品の供給が大いに減少して需要と適合し、従つて其の價格は再び生産費の水準に上り、或は寧ろ、供給が需要以下に減少して、従つて價格が生産費以上に騰貴する。斯くの如く、資本は絶えず一の事業から移出して他の事業に移入するもので、價格の高い所

には移入がありすぎ、價格の低い所には移出がありすぎる。(従つて、供給は常に生産費に依つて決定される。即ち、供給の増減が生ずるのは、いつでも生産費を基礎とした現象である。)別に需要が生産費に依つて決定される事を論證する道もあるが、其事はこゝでは略しておく。

右述べる通り、需要供給の變動は、常に商品の價格を其の生産費に歸着させるものである。尤も商品の實際の價格はいつでも、生産費の上か下かに在るのだが、其の騰貴と下落とは自然に差引がつくので、或る期間を通じて、景氣と不景氣とを一くるめにして勘定すれば、總ての商品は互に其の生産費を標準として交換されてゐる。故に商品の價格は其の生産費に依つて決定されるものである。

但し此の生産費が價格を決定するといふことは、ブルジョア經濟學者の云ふような意味に解してはいけない。ブルジョア經濟學者は云ふ。商品の平均價格は生産費に等しい。それが法則だ。そして彼等は、價格が騰貴したり下落したりする、アノ動搖混亂を偶然の出來事だと見る。然るに我々は、その動搖混亂を法則と認め、生産費の價格決定を偶然と考へる事が出来る。此の動搖混亂こそは、實に恐るべき破壊性を帯び、恰も地震のようにブルジョア社會の地盤を

揺り動かしてゐるもので、其の動搖の爲にこそ價格が生産費との一致を生ずるのである。此の混亂無秩序の總計が即ちブルジョア社會の秩序である。そして其の産業的無政府状態の進行中に於いて、又その景氣と不景氣との循環的運動の中に於いて、一方の行過ぎと、他方の行過ぎとが、相互の競争に依つて相殺されるのである。(ブルジョア學者が、此のブルジョア社會を、混亂のない、平靜な者のように説くのは、大間違ひである。)

そこで要するに、商品の價格は如何にも生産費に依つて決定されるのだが、それは、只、生産費以上に騰貴した期間が、それ以下に下落した期間に依つて相殺されるが爲である。そして勿論これは、個々の事業に對してではなく、其の同じ産業部門の全體に對して當てはまるのである。従つて又、個々の製造業者に對してではなく、製造業者の全階級に對して當てはまるのである。

猶、生産費が價格を決定するといふ事は、商品の生産に要する労働時間が價格を決定するといふ事になる。ナゼといふに、生産費は第一に原料と道具の消耗と、第二に直接の労働を意味するが、其の原料と道具とは、其生産の爲に若干の労働日数を要するもので、従つて若干の勞

働時間を代表するものであり、又直接の労働は固より時間で計量されるものであるから。

三 賃金は何で極まるか

一般の商品の價格を支配する法則は前章で分つたが、其の法則は自然に又、労働賃金(即ち労働力の價格)を支配する。

即ち労働賃金は需要供給の關係に依つて決定される。詳しく云へば、労働力の買手たる資本家、労働力の賣手たる労働者との間に於ける競争に依つて、或は騰貴し、或は下落する。そして其の賃金の變動は一般の商品價格の變動に相應する。然し其の變動の範圍内に於いて、労働力の價格は矢張り其の生産費に依つて決定される。即ち労働力といふ商品の生産に必要な労働時間に依つて決定される。

然らば、労働力の生産費とは何か。

労働者が労働者としての生計を営む爲に、及び労働者としての修業を受ける爲に、必要な費用がそれである。

故に労働者の修業の時間が短ければ、其の労働者の生産費が少く、従つて其の労働力の價格

(即ち賃金)が安い事になる。見習ひ期間の殆ど必要でない仕事、即ち労働者が只そこに體を持つて來さへすればよいといふような仕事では、其の労働者の生産費は殆ど只だ、其人を働けるだけにする爲の必需品に限られる。即ち其人の労働力の價格は、生活必需品の價格に依つて決定される。

所が、こゝに一つ別の考慮が必要になる。一體製造業者が生産費を計算して、それに依つて生産物の價格を定めようとする時、必ず労働用具の消耗分を勘定に入れる。例へば、千圓で買った機械が十年間で役に立たなくなるものとすれば、一年に百圓づゝを其の消耗分として勘定に入れおき、十年後に新しく機械を買入れる事になる。それと同じように、労働者もいつか老衰して役に立たなくなるのだから、其の場合、更に若い労働者をそれに代らせる爲に、平生から労働者に子孫を養殖させておく必要がある。従つて労働力の生産費の中に、生殖費用(即ち妻を養ふ費用を加算しておかねばならぬ。それはつまり、機械の消耗分と同じく、労働者の消耗分を生産費の中に計上するわけである。

斯くて労働力の生産費は、労働者の生活費と生殖費となる。それが即ち労働賃金である。そ

して其の賃金が最低賃金と呼ばれる。此の最低賃金は一般の商品價格が生産費に依つて決定される場合と同じく、個々の労働者に當はまるわけではなく、只労働者階級の全體に當はまる。個々の労働者について云へば、自ら生活し且つ生殖する事の出来るだけの賃金を得て居ないものが、幾らでもある。けれども労働者階級全體の賃金は、種々の變動を経てゐる中に、此の最低額に合致するものである。

扱、以上に於いて、賃金及び一般の商品價格を支配する大體の法則が分つた。これから更に今少し細かい研究に進む。

四 資本の性質と其の成長

資本は原料、労働用具、及び諸種の生活資料から成り立つもので、それが更に新たな原料、新たな労働用具、新たな生活資料の生産に使用されるのである。そしてこれらの資本構成物は總て労働に依つて作られたもの、即ち労働の産物であり、『蓄積された労働』である。

經濟學者は右の如く説明する。

然しそれは、ニグロの奴隷を黒人だと説明するやうなものだ。黒人は黒人である。只それが

或る條件の下に置かれて初めて奴隷となる。紡績機械は糸を紡ぐ機械である、只それが或る條件の下に置かれて初めて資本となる。それらの條件から切りはなせば、金塊がそれ自身では貨幣でないのと同じく、紡績機械は決して資本でない。

凡そ人間が生産を行ふには、只自然界に對して働きかけるばかりでなく、又人間相互に働きかけるものである。人間は或る方法に依つて共同に働き、又互に其の働きを交換する事に依つてのみ生産を爲す。即ち人間が生産する爲には、必ず相互の間に一定の社會關係を作る。そして其の社會關係に依つてのみ、自然界に働きかける。それで初めて生産が行はれる。

此の社會關係と、及び人間が相互に働きを交換して、生産行爲の全體に参加する其の條件とは、その時々々の生産方法の性質に從つて自然に變化する。例へば、鐵砲といふ新しい武器が發明されれば、軍隊の組織が必然的に變化するようなものである。

斯様にして、生産の社會關係は生産方法の發達、即ち生産力の發達と共に變化する。そして此の生産上の諸關係の總和が即ち謂ゆる『社會』を構成するのである。但し其の社會といふのは、歴史の發達上に於ける或る段階の一社會であり、特殊な性質を有する一社會である。古代

の(奴隷制度の)社會、中世の封建社會、近世の資本家社會、これが皆それ々に其の當時の生産關係の總和であつて、人間の歴史の發達上に於ける特殊の階段を示してゐるのである。(つまり、人間の社會は昔から今日まで色々に變つて來てゐるが、それは人間の生産方法が發達するにつれて、生産を行ふについての、人間同志の間の諸關係が變つたからである。そして其の生産事業についての色々の關係が集まつて、其の時代々々の社會を構成するので、從つて社會に古代、中世、近世などいふ差別が生じ、それ々に特殊な性質を示してゐるのである。實例で云へば、古代には主人が奴隷を養つて其の奴隷に生産をやらせるといふ社會關係があり、中世には大名が農奴を支配して其の農奴に生産をやらせるといふ社會關係がある。そしてそれが奴隷制度、封建制度といふ、それ々に特殊の性質を持ち、又それが歴史の發達して來た階段になつてゐるのである。)

そこで資本といふ者も矢張り生産上の社會關係である。即ち資本家社會(ブルジョアの社會)の生産關係である。原料、労働用具、生活資料、これらの物から資本は成り立つのだと云ふけれども、其の諸物品は、或る特殊の條件の下に於いて、或る社會關係の中に於いて、產出され

蓄積されたのである。又その諸物品は、或る特殊な條件の下に於いて、或る社會關係の中に於いて、**新な生産に使用されるのである。**そうして此の特殊な社會的性質が、即ち右の諸物品に資本のスタンプを押すのである。

資本は原料、勞働用具、生活資料だけから成り立つのではない。即ち有形的の生産物だけから成り立つのではない。同時に其は交換價值から成り立つ。資本を構成する生産物は總て商品である。故に資本は一定量の有形的生産物であるばかりでなく、又一定量の商品であり、交換價值である。例へば、**毛糸を綿糸に代へ、麥を米に代へ、鐵道を汽船に代へても、資本としては何んの變りもない。**只資本の實體たる其の綿糸や米や汽船が、以前の實體たる毛糸や麥や鐵道に比べて、同じ交換價值、同じ價格を持つてゐればよいのである。資本の形態は絶えず變化しても、資本その者は何等の變化をも受けない。

但し、總ての資本は一定量の商品即ち(交換價值)であるけれども、一定量の商品(即ち交換價值)が總て資本だ云ふわけには行かない。

交換價值は如何なる分量でも交換價值である。一萬圓の家屋は一萬圓の交換價值である。一

枚一錢の紙は一錢の交換價值である。他物と交換され得る生産物は皆商品であつて、それの他物と交換される割合が即ち其の商品の交換價值である。そして其の交換價值を貨幣で現はしたのが價格である。だから生産物の數量は、その商品たる性質、交換價值たる性質、價格を持つ者としての性質に、何等の影響も及ぼさぬ。木は大きくても小さくても木である。鐵を他の生産物と交換する時、それが一斤であつても一千斤であつても、鐵の商品たる性質、交換價值たる性質に變りはない。只其の數量に依つて、價值に大小があり、價格に高低があるだけの事である。

然らば或る分量の商品、或る分量の交換價值がどうして資本になるのか。それは、商品が獨立の社會力として働き、現在の生きた勞働力を交換して、自己を維持し且つ増殖する事に依つてである。(即ち、勞働者が原料や機械や生活資料の力に使はれて、更にそれらの商品を製造し増殖する爲に働かせられる時、それらの商品が資本になるのである。)だから、勞働能力より外に何物をも持たない階級(即ちプロレタリア階級)の存在が、資本に取つて必須な豫備條件である。

過去の労働、蓄積された労働、物體化された労働が、現在の生きた労働の上に支配力を持つといふ事が、即ち「蓄積された労働」に資本の性質を附與するのである。

資本とは、蓄積された労働が、生きた労働の爲に、新しい生産の手段になるといふ事ではなく、生きた労働が、蓄積された労働の爲に、其の交換価値を維持し且つ増殖する爲の手段になるといふ事である。

五 賃金労働と資本との關係

資本家と賃金労働者との間の交換は、どんな風にして行はれるか。

労働者は自分の労働力と交換して生活資料を受取る。然るに資本家は、自分の生活資料と交換して、労働を受取る。即ち労働者の生産的労働を受取る。即ち労働者が自分の消費した物を復舊するばかりでなく、更に「蓄積された労働」(即ち資本)の爲に、それが以前持つてゐたよりもヨリ大なる価値を與へる所の、労働者の創造力を受取る。労働者が資本家から受取るのは、現存せる生活資料の一部であるが、それは何の爲に役立つか云へば、直接の消費である。一體、人が生活資料を消費する場合、その生活資料で生命の支へられる期間を、新しい生活資料

を生産する爲に、(即ち消費された価値の代りに、労働を以て新価値を作る爲に)使用しないならば、其の生活資料は永久に失はれてしまふのである。然るに労働者は其の大切な力を、生活資料と交換して資本家に引渡すのである。従つて労働者に取つては、再生産力は全く失はれ盡すのである。

一例を擧げて見る。或る日傭取が一日一圓で農家に雇はれ、終日働いて二圓の収入を擧げることとする。農家の主人は、日傭取に與へた価値を回収するだけでなく、それを二倍にしてゐる。即ち彼は日傭取に與へた一圓を生産的に、増殖的に消費したのである。彼は日傭取の労働力を一圓で買ったが、其の労働力は二倍の価値ある作物を作り出すので、彼はつまり一圓で二圓を作り出した事になる。之に反し日傭取は、自分の生産力を主人に引渡して、その代りに一圓を受取つたが、其の一圓は生活資料と交換されて、早かれ晩かれ消費される。故に此の場合、一圓の金は二重の意味に消費されてゐる。資本家としては再生産的に、労働者としては不生産的に消費されてゐる。されば資本なる者は必ず賃金労働を前提とし、賃金労働なる者は必ず資本を前提としてゐる。両者は相互に條件づけられ、両者は相俟つて發生する。

又、木綿工場の労働者は木綿品ばかりを生産するの否、彼は資本を生産する。彼は價値を生産する。そしてその價値が、更に彼を支配し、又その支配に依つて更に新しい價値を作り出す事になる。

資本が増殖するには、必ず先づ労働力を交換されて、賃金労働の活動を起させねばならぬ。又賃金労働者の労働力が資本と交換される時には、必ず資本を増殖し、労働者を奴隷にする其の力を強める事になる。故に資本の増加はプロレタリア(即ち労働者階級)の増加である。

斯くて資本家および資本家經濟學者は主張する。資本の利益と労働の利益とは同一であると如何にも其の通りだ！。資本が労働者を使はなければ、労働者は死ぬる。又、資本が労働力を搾取しなければ、資本は死ぬる。そして資本は労働を搾取する爲に、それを買はねばならぬ。斯くて生産資本が速かに増大すればするほど、それだけ産業は繁昌し、それだけブルジョアは富裕となり、それだけ世間は好景氣となり、資本家は甚だ多く労働者を要求し、労働者は可なり高い賃金を取る事になる。故に、生産資本の成るべく速に増大する事は、即ち労働者が可なりの生活を爲す爲の、必須の條件である。

然し生産資本の増大とは何か。生きた労働に對する、蓄積された労働(即ち資本)の力の増大だ。労働階級に對する、ブルジョアの支配力の増大だ。賃金労働が自分を支配する所の富、自分に敵對する所の力(即ち資本)を産出する時、労働者雇入れの資料、即ち生活の資料は、再び労働者の手に戻つて来るけれども、其の結果としては必ず、其の労働が重ねて資本の一部分となり、更に資本の増大を促進する損拵なるものである。

資本家の利益と労働者の利益とが一致すると云ふのは、只だだけの意味である。即ち資本と賃金労働とは、一個の事實關係(一つの事柄)の兩面だといふ事である。それは丁度、高利貸と道樂者とが相俟つて生存するといふやうなもので、一方が常に他方の條件になつてゐる。

賃金労働者が賃金労働者である間は、どんなにしても彼れの運命は資本に懸つてゐる。労働者、資本家との間に利害の一致があると稱せられるのは、即ち其の事である。

資本が増大すれば賃金労働の分量が増大し、従つて賃金労働者の数が増大する。それは即ち資本の支配がいよゝ多數人の上に及ぶ事を意味する。そこで最も好都合の場合を想像しても生産資本が増大すれば労働に對する需要が増大し、従つて賃金(即ち労働力の價格)が増大する

といふに過ぎない。

例へば、こゝに一つの小さな家があるとして、其の周囲の家々が同じように小さい間は、住宅として別に不足がない。然るに其の小さい家の隣に一つの宮殿が建てられると、其の小さい家は如何にも見じめな小屋になつてしまふ。そして其の家の居住者に社会的地位のない事が感じられる。たとひ文明の進歩に連れて、其の家が段々高く築きあげられても、隣の宮殿がそれと同じように、或はそれより以上に大きくなれば、小さい方の家の居住者は次第々々に不平不愉快の度を増して来る。

賃金が可なりの騰貴を示すのは、必ず生産資本の急激な増大を前提としてゐる。所が、生産資本の急激な増大は、必ず亦急激な、富の増大、奢侈の増大、社会的慾望の増大、社会的享樂の増大を伴ふ。そこで、労働者の快樂は何程か増大しても、資本家の大快樂に比べ、一般社会の發達に比べると、労働者の感ずる社会的満足は寧ろ減少してゐる。人間の慾望なり快樂なりは、其の起原を社会に發するものである。だから我々は、慾望に充足を與へる外物その者に依つて快樂を評價せず、社会的標準に依つてそれを評價する。慾望なり快樂なりは社会的の性

質を持つてゐるから。従つて比較的の性質を持つてゐる。(例へば炎天の氷水一杯が如何に渴きをいやす實効を持つてゐやうにも、今の社会では當り前の事である。社会的標準から評價すれば、氷水など何んでもない。箱根の別荘に避暑してゐるのに比較すれば、快樂などいふほどのものではない)

そこで賃金は決して、それと交換し得られる所の商品の分量のみで決定されるものではない。それには色々の要素が加はつて来る。労働者が自分の労働力に對して直接に受取るのは何程かの貨幣であるが、賃金が其の貨幣價格だけで決定されるかと云ふに、必ずしもそうではない。

十六世紀に於いて、アメリカに豊富な鑛山が発見された結果、ヨーロッパの金銀が増加した従つて金銀の價値は、他の商品との比較上、下落した。然るに労働者は以前と同額の賃金(即ち貨幣)を得てゐた。そこで彼等の労働力の貨幣價格は以前と同じであるけれども、其の貨幣と交換し得られる商品が以前に比べて少額になつてゐるので、賃金は實際上、下落した譯である。そして此事は、其後に於ける資本の増殖、ブルジョアの勃興を助長する一原因になつた。

更に他の場合を考へて見る。一八四七年の冬、凶作の結果として、穀類、肉類、バターなどの

價額が著しく騰貴した。此の場合、労働者が以前と同じ賃金しか得てゐなかつたとすれば、それは矢張り賃金の下落である。彼等は以前と同額の貨幣で、以前より少い生活資料しか買へないのである。

今度は又、賃金は元のまゝであるのに、新しい機械の應用、豐作、その他の結果として、總ての農作物や工業品の價格が下落したとする。此の場合、労働者は、以前と同じ金額で以前より多くの商品を買ひ得るのだから、實際上、賃金が騰貴したわけである。

そこで労働力の貨幣價格(即ち名目上の賃金)は、必ずしも、實質上の賃金と一致するものではない。故に我々が賃金の騰落を論ずるには、常に名目上の賃金と、實質上の賃金とを、併せて考慮の中に入れねばならぬ。

然し名目上の賃金(即ち労働者が資本家から受取る所の貨幣額)と、實質上の賃金(即ち労働者が其の貨幣で買ひ得る商品の分量)との事を考へただけで、賃金の意義に關する事が盡されるわけではない。

賃金は又特に資本家の利潤との關係に依つて決定される。それを比較賃金、相對賃金といふ

實質賃金は、労働力の價格を、他の商品の價格との關係上から表示したものであるが、相對賃金は之に反し、今創造された新價值に對する生きた労働の分前を、蓄積された労働(即ち資本)の分前との關係上から表示したものである。(モット分りやすく云へば、相對賃金は、労働者の賃金を資本の利潤に比較して考へた場合である。)

六 賃銀と利潤の關係

前に述べた通り、『労働賃金なるものは、労働者が自分の生産する商品に對して受ける所の分前ではない。それは只、資本家が労働力買入の爲に、兼て用意してゐた所の貨幣の一部である。』けれども資本家は、労働者の生産した商品を賣つて、其の價格の中から、前に拂つた賃金を取戻さねばならぬ。猶それを取戻すについては、彼が支拂つた生産費以上に或る剩餘(即ち利潤)を生ずるやうにするのが原則である。資本家に取つては、労働者が生産した商品の賣上價格は、三つの部分に分たれる。即ち第一は、前拂ひされた原料の價格の回收、及び、道具機械、その他の労働用具の消耗の回收。第二は、前拂ひされた賃金の回收。第三は、それ以上の剩餘、即ち利潤。此の中、第一の部分は、以前から存在してゐた價值を回收するだけの事だ

が、賃金の回収と剰餘利潤とは、明かに全く、労働者の労働に依つて作り出だされた所の、その原料の上に加へられた所の、新價值から得られるものである。そこで此の意味に於いて我々は賃金と利潤とを、労働者の生産物の分前と見て、相互に比較させる事が出来る。

實質上の賃金は以前より變化なく、或は騰貴してゐても、それで猶ほ相對的の賃金の下落してゐる場合がある。例へば、總ての生活資料の價格が三分の二の下落をしてゐるのに、賃金は三分の一しか下落しない（即ち三圓から二圓に下落したとする）。此の場合、労働者は其の二圓で、以前の三圓の時よりも多くの商品を買ひ得るけれども、それでも其賃金を資本家の利潤に比べて見ると、却つて減少した事になつてゐる。資本家（例へば製造業者）の利潤は一圓だけ増加したのだが、それは即ち、彼が労働者に拂ふ交換價值は減少してゐるのに、労働者は以前よりも多量の交換價值を生産せねばならぬといふ事である。資本の分前は労働の分前に比べて増加したのである。資本と労働との間に於ける富の分配が一層不平等になつたのである。資本家は同額の資本を以て一層多量の労働を支配する事になつたのである。資本家階級の労働者階級に對する權力が増加し、労働者の社會的地位が一層下落したのである。

然らば賃金と利潤との相關的の騰落を決定する法則は何か。

兩者は互に逆比例を爲してゐる。資本の分前（即ち利潤）は、労働の分前（即ち賃金）の下落に伴ひ、その同じ比例で騰貴する。其の逆は又逆である。換言すれば、利潤は賃金の下落する程度だけ騰貴し、その騰貴する程度だけ下落する。

右に對し、或は斯ういふ議論が出るかも知れない。資本家は、他の資本家との間に自分の生産物の有利な交換をして、それで利潤を取る事が出来る。或は新市場を開拓したとか、或は舊市場で一時的に需要が増加したとかいふ事の結果として、兎にかく自分の商品に對する需要の増加に依つて利潤を取る事が出来る。だから資本家の利潤は、賃金の騰落（即ち労働力の交換價值の騰落）に關係なく、他の資本家の利益を掠める事に依つて増加され得るではないか。猶又資本家の利潤は、労働用具の改善、自然力の新應用などに依つても増加され得るではないかと然し先づ第一に考ふべきは、賃金と利潤との騰貴する順序が逆様になつた所で、其の結果は同一だといふ事である。論者の云ふ場合では、如何にも、賃金が下落した爲に利潤が騰貴したのではない。けれども利潤が騰貴したから賃金が（その割合上）下落したのである。つまり資本

家は、同じ分量の他人の労働に依つて、以前より多量の交換価値を買ひ取り、そして労働に對しては、それが爲に増拂ひをしないのである。だから労働は、資本家の取る利潤に比べると、以前より少い支拂ひを受けてゐるわけである。

次に考ふべきは、前に述べた通り、諸商品の價格に變動があるに拘らず、各商品の平均價格（即ち他の諸商品と交換される割合）は、常に生産費に依つて決定されると云ふ事である。だから資本家同志の間に於ける掠めあひは、必然的に平均するものである。（資本家階級全體が掠めあひに依つて利潤を高め得る筈がない。）又機械の改良や自然力の新應用は、以前と同一分量の労働を資本を以つて、以前より多量の商品（一定の労働時間）を生産させる事は出来るが、其の商品の増加は決して交換価値の増加ではない。例へば紡績機械の發明に依つて、以前より二倍だけ多量の糸が出来るとする。以前五十貫出来たものが、今は百貫出来るとする。其の場合、其の百貫の糸と交換される他の諸商品の額は、（少し永い期間について云へば）、以前の五十貫を交換されたものより多くはならない。ナゼかといふに、糸の生産費が半減してゐるから（即ち同じ費用で二倍の糸が出来ること）糸の價格が半分以下落する。従つて

商品の分量の増加は交換価値の増加にならない。

最後に、資本家階級が、（一國に於いてでも、全世界を通じてでも）、生産の純益を如何なる割合で彼等自身の間に分配しようとも、其の純益の總額は、いつでも、蓄積労働（即ち資本）の全體が直接労働に依つて増加されただけの額に過ぎない。故に此の純益の總額は、労働が資本を増加させる割合、即ち利潤が賃金に比べて騰貴する割合、その同じ割合に於いて増加するものである。

七 資本と労働との利害は正反對

以上によつて、資本と賃金労働との利害が全く正反對である事が分る。

資本の急激な増加は即ち利潤の急激な増加である。利潤が急激に増加し得るのは労働の價格（即ち相対的の賃金）が、同じく急激に下落した場合に限られてゐる。（前に云ふ通り）たとひ實質賃金が名目賃金（即ち労働の貨幣價值）と同時に騰貴しても、其の實質賃金が利潤と同じ比例で騰貴しなければ、相対的賃金は矢張り下落してゐる。例へば、好景氣時代に、利潤は三割も騰貴してゐるのに、賃金は五分だけしか騰貴してゐないとすれば、相対的賃金は増加したの

でなく、矢張り減少したのである。

故に、資本の急激な増加と共に労働者の収入が増加しても、それと同時に、労働者と資本家とを分つ所の社会的の溝は益々廣くなる。即ち労働に對する資本の権力が増大し、資本に對する労働の隷屬が愈々甚だしくなる。

そこで、資本の急激な増加が労働者の利益になるに云ふのは、實は只次の意味である。労働者が急激に資本家の富を増加させればさせるほど、労働者に落ちて来るパン屑のこぼれが増加し、従つて使役される労働者の數が増加し、資本に隷屬する奴隸の數が増加する。

斯くて、労働階級に取つて最も好都合な状態、即ち資本が最も急激に増加した場合でも（たとひ労働者の實生活が、頗る多く其の爲に改善されても）労働者の利益と資本家の利益との反目は決して除去されない。利潤と賃金とは、以前の通り、矢張り逆比例を爲してゐる。

資本が急激に増大すれば賃金も騰貴するだらう。けれども資本の利潤はそれと比較にならぬほど急速に騰貴する。労働者の實生活は改善されるけれども、其の社会的地位は低下する。労働者と資本家とを隔てる社会的の溝は廣くなる。

今一つ最後に、生産資本の最も急速な増加が賃金労働に取つて最も好都合な状態だと云ふのは、實に只次の意味である。労働階級が自分に敵對する權力（自分を支配する所の他人の富）を急速に増大させればさせるほど、彼等が更に新しく資本家の富を蓄積する爲に働かされ、更に資本の権力を増大する爲に働かされ、そして自ら甘んじて、資本家が労働者を引きずる爲の金の鎖を鑄造させられるのに、甚だ好都合な状態を生ずると云ふのである。

一體、生産資本の増加と賃金の騰貴とは、ブルジョア經濟學者等の云ふように、本當に不可分なものであらうか。我々はそれを言葉のほりに信じてはならない。若し彼等が露骨な言葉で資本がふとればふさがるほど、その奴隸もラクが出来ると云つたとしても、我々は輕々しくそれを信じてはならない。昔の大名などは、金びかの家來共を引連れたりする事を誇りとしたものだが、今のブルジョアはそんな馬鹿げた真似をするには、餘りに醒めて居り、餘りに善く計算を知つてゐる。ブルジョアは其の生存の必要上、嚴密な計算をせずには居られないのである。だから我々は、次の問題をモット細かに考へて見る必要がある。

生産資本の増加は労働賃金に對して如何に影響するか。

ブルジョア社會の生産資本が全體に於いて増加すれば、労働の多方面な集積が起る。資本家は其の數と大いさを増し、従つて資本家間の競争が増す。資本家が益々大きくなれば、産業界の戦場に於いて、益々巨大な武器を以て、益々有力な労働軍を率ゐる事になる。

一の資本家が他の資本家を戦場から驅逐するのは、只安賣をするに在る。安く賣る爲には安く生産せねばならぬ。即ち労働の生産力を出来るだけ高めねばならぬ。然るに労働の生産力は主として、分業の進歩と、機械の普及および改善とに依つて高められる。そして分業の行はれる労働軍が大なれば大なるだけ、機械の使用される規模が大なれば大なるだけ、それに應じて生産費が益々減少し、労働が益々多産的になる。そこで資本家の間に於いて、盛んに分業と機械とを増加し、それを出来るだけ大規模に搾取しようとする競争が各方面に起る。

そこで若し一の資本家が、分業の増進に依り、新機械の使用および改善に依り、又一層有利な一層大規模な自然力の搾取に依り、同じ分量の労働を以て、他の競争資本家に比べて、一層多量な商品を生産する方法を發見して、例へば他の資本家が半反の布を作る間に一反の布を作り得るとしたなら、此の資本家はどんな事をやりだすか。

彼は其の布を元の價格で賣りだす事が出来る。けれども、それでは敵を驅逐して、自分の販路を擴張するわけに行かない。彼は今、擴大された生産力に依つて、自分の商品をヨリ安く賣る事が出来ると同時に、ヨリ多く賣らねばならぬ。即ちヨリ大なる販路を獲得せねばならぬ。そこで彼は其の布を競争者のより安くして賣りだす。

けれども彼は又、競争者の半反の價格で自分の一反を賣りはしない。生産費から云へば、それでも引合ふわけだが、それでは餘分のモウケがない。それに彼は、ほんの少しでも安く賣りさへすれば、それで敵を驅逐し、少くとも其の販路の一部分を取りあげる事が出来る。

然し此の資本家の特權は、決して永續するものでない。他の競争資本家も、同じ機械と同じ分業とを、同じ(若しくはヨリ以上の)大規模で採用する。そして遂にはそれが一般に行はれて、布の價格は元の生産費以下に下落するばかりでなく、現在の生産費以下にまでも下落する。

そこで資本家は、お互の關係上からすれば、其の新しい生産手段の採用以前と全く同じ状態の下に置かれる。競争が又新規に始まる。一層細かな分業、一層多くの機械、一層大規模の搾取。そして又以前と同じ結果を繰返す。

八 資本家仲間の競争の影響

以上に於いて我々は、如何に生産の手段方法が絶えず變更され、革命されるか、又如何に必然的に分業が一層大なる分業を招き、機械の使用が一層大なる機械の使用を招き、事業の大規模が一層の大規模を招くかを見た。これが即ち、資本家生産をば絶えず其の舊軌道から放りだし、そして資本をして彌がうえに労働の生産力を緊張させる所の法則である。之が即ち又、資本に對して暫くの休息をも與へず、絶えず「進め！進め！」とさうやく所の法則である。そして之が即ち又、景氣不景氣の動搖の間に於いて、商品の價格を必然的に其の生産費と一致させる所の、前記のあの法則に外ならないのである。

一の資本家が如何に有力な生産手段を戦場に運びこんでも、競争はすぐにそれを一般化させてしまふ。そしてそれが既に一般化された以上、其の瞬間から、彼れの資本が有する大生産力の唯一の結果は、以前と同じ價格で、以前の十倍、二十倍、百倍の品を供給せねばならぬといふ事である。然るに實際では、大多量の販賣で賣價の下落を償ふ爲、彼は恐らく千倍もの販賣を求めねばならぬ。それに又、今度は、多くの利潤を得る爲ばかりでなく、(生産機械その者

が次第に高價になつてゐるのだから)其の生産費を回収する爲にも、彼は益々多量の販賣を必要としてゐる。猶又、その販路の大擴張が、彼一人としてのみでなく、競争者たる總ての資本家として死活の問題である。そこで古い競争が又始まる。そして生産機關が有力な者に進歩してゐればゐるほゞ、其の競争が益々激烈になる。斯くて分業と機械の使用が、一層の大規模を以て新に遂行される。

所で、此の生産機關の力が如何様であらうとも、競争は常に商品の價格を生産費に引下げる事に依つて、其の力から金の玉子を奪はうとする。即ち競争が生産を安價にするのと同じ程度に於いて、一層の安價で一層多量の品物を賣る事が、不可抗の法則となる。斯くて資本家は自分の努力に依つて何物をも益せず、只同じ労働時間内に一層多量の品物を生産する義務を負ふだけである。つまり資本家は、資本の利殖について一層困難な地位に陥るのである。斯くの如く、競争は生産費の法則を以て絶えず資本家を苦しめ、資本家が其の競争者に對して作る所の總ての武器は皆彼自身に向けられて來るので、そこで資本家は益々ヤツキミなつて、絶えず競争に勝利を占める事をたくらみ、現在の機械がまだ競争上の時代おくれにもならないのに、早

くも高價な新機械を買込んで、新しい分業法でやりだしたりする。

斯ういふ熱狂的な躍起運動が全世界の市場に於いて、一齊に起りつゝある事を想像せよ。然らば資本の増殖、集積、及び集中の爲に、分業の進歩と、新機械の使用とが、如何に猛烈に、不斷に、急速に、層一層の大規模を以て行はれつゝあるかが、分るであらう。

然し、生産資本の増大は不可分なる是等の事情が、賃金の決定に對して、果して如何なる影響を及ぼしてゐるか。

分業が進歩すれば、一人の労働者が五人、十人、二十人分の仕事を爲し得る。従つて労働者間の競争が五倍、十倍、二十倍に増加する。

又、分業の進むに従つて、労働が單純化する。労働者の特殊な熟練が價値を失ふ。労働者は只一個の、單純な、單調な生産力に化する。其の労働は誰にも出来るものになる。だから競争が各方面から起つて来る。猶ほ労働が斯様にして益々單純になり、其の修業が益々容易になれば、前に云つた通り、其の生産費は益々少くして済む事になり、従つて賃金は益々下落する事になる。

故に、労働が益々不愉快なものになれば、競争は益々増大し、賃金は益々下落する。そして労働者は、今までよりも永く働くか、或は同じ時間内に今までよりも多くの仕事をするか、兎にかく今までよりも多く働いて、賃金の總額を維持しようとする。斯くて彼は止むなく分業の悪結果を増大する。其の結果は、働けば働くほど賃金が下がるこいふ事になる。

機械はそれと同一の結果を、遙かに大規模で持ち來たす。即ち熟練労働を不熟練労働に代へ男を女に代へ、大人を小供に代へる。

以上、我々は、資本家同志の間に於ける産業戦を大づかみにスケッチして見た。此の戦争の特徴は、労働軍を徵集するよりも、それを除却する事に依つて勝利が得られるといふ點に在る。大將たる資本家等は、誰が産業兵士の最大多數を除却し得るかを、競争してゐるのである。

尤も、經濟學者等は、機械の爲に餘計者となつた労働者は、新しい雇はれ先を見つけたすと云つてゐる。けれども彼等もさすがに、解雇された労働者等が直接に、新しい産業部門に仕事を見つけたすとは云はない。斯ういふ嘘に對しては、事實が餘りに明白である。畢竟、彼等が主張するのは、只、労働階級の他の構成分子の爲に、(例へば、今廢止された産業部門に之から

はいらうとしてゐた青年労働者の爲に、何か新しい職業が開かれるに云ふに過ぎない。之は如何にも、廢物の労働者にとつて大いに有難い事に相違ない。資本家諸君にとつて、搾取さるべき新鮮な血と肉との不足する氣遣ひはない。死ぬる者は勝手に死なせるに限る。それで此の事實は、労働者の爲よりも、資本家自身の爲に、ヨリ多くの慰藉を與へるものである。若し賃金労働者の全部が機械の爲に亡びるのであつたら、(資本は賃金労働なしには存在し得ないのだから)、それこそ資本にとつて大變な事だらう。

然し、今假りに、機械の爲に直接その仕事を奪はれた人々、並びに其の産業部門にはいれる機会を待つてゐた青年労働者等が、悉く皆な新たな職業を見つけたら、その場合、彼等は果して、元の仕事と同じだけの賃金を其の新職業から得るものと信じられるだらうか。それは有らゆる經濟法則に反する事である。近世産業が常に、複雑な高級な仕事から、單純な低級な仕事に移つて行く事は、前に述べた通りである。然らば機械の爲に放りだされた労働者の群が、賃金の一層低い方面より外に、隠れ場を見つけたし得る筈がない。

只その例外だと云はれる者が一つある。それは機械その者の製造に使はれる労働者である。

産業界に機械の需要と消耗とがヨリ多くなれば、機械の製造に労働者を使ふ事がヨリ多くなる。そして此の部門に使はれる労働者は、熟練あり教育ある労働者だと云ふのである。

此の主張は、以前でも半面の眞理しか持つてゐなかつたが、一八四〇年以後になつては、全くその眞理らしい外觀をも失つてしまつた。さういふのは、今日では種々雑多な機械が、機械その者の製造の爲に、廣く使用される事になつたので、機械工場に使はれる労働者は、精巧を極めた機械の傍らに立つて、甚だ馬鹿げた機械の役を務めるに過ぎないからである。

但し、機械の爲に解雇された男工の代りとして、其の工場では恐らく三人の子供と一人の婦人とを雇ふだらう。然し其の男工の以前の賃金は、一人の婦人と三人の子供を養ふに足る筈ではなかつたか。最低賃金は労働階級の存続と蕃殖とを遂げしめるに足る筈ではなかつたか。然らば彼のブルジョアの言草は一體何を意味するのか。外でもない。労働者の一家族の生計を營む爲に、今では以前に比べて四倍の人命が消費されると云ふ事だ。

之を要するに、生産資本が増大すればするほど、分業と機械の使用とが益々擴張される。分業と機械の使用とが擴張されればされるほど、労働者の間に於ける競争が益々烈しくなり、其

の賃金が益々下落する。

おまけに、社會の稍や上層から、小企業者や、小資本の利子で食つてゐた人達が、労働階級に落ちこんで来る。彼等は銘々の腕を労働者の腕と並べて差出すより外に能がない。斯くて仕事を求める爲に差出される腕の林が段々に茂つて来る。そして其腕は段々に瘦せて来る。

成功の第一要件が大規模の生産に在る時、小企業者が競争に堪へ得ない事は云ふまでもない。又資本が一般に大きくなれば、其利子が低くなる事、従つて小資本家は最早利子だけで食へなくなる事、従つて彼等が苦しまぎれに小企業者の列に加はり、プロレタリアの候補者の数を増す事、これらも亦説明を要しない。

最後に、資本家は前述の情勢に迫られて、現存の巨大な生産手段を絶えず一層の大規模に擴張せねばならぬ事になり、其爲には、又、信用制度（金融機關）の有らゆるバネ仕掛を働かせる事になるが、其進行の程度に應じて、産業上の地震（即ち恐慌）が頻發する。此の地震の最中、商業界は其の富、其の生産物、甚だしきは其の生産力の一部を、下界の神々の犠牲にして、それで纔に自己を保全し得るのである。此の恐慌は、次の理由だけでも、益々頻繁になり、

益々激烈になる筈である。即ち生産物の分量と、従つて又市場擴大の要求が増加すれば、其の増加の程度に應じて、世界市場は絶えず益々縮小する。そして従來の恐慌の度毎に、まだ征服してゐなかつた所の、或はほんの軽く搾取してゐた所の市場を、世界的商業の領域内に組みこんでゐるので、其うに搾取すべき新市場の残つてゐるのは、いよ／＼ますます減少して行く。けれども資本は労働を食つて生てゐるばかりではない。高貴な而も野蠻な主君として、資本は其の奴隸の死骸を、即ち恐慌の犠牲となる労働者の大群を、悉く自分の爲に殉死させる。斯くて我々は知る。資本が急激に増加すれば、労働者間の競争が一層急激に増加する。そして労働階級のための職業手段および生活手段が、それに應じて一層急激に減少する。然るに、それにも拘はらず資本の急激な増加は賃金労働の爲に最も好都合な條件である！。

（終）

297
313

譯者より

▲「労働と資本」はマルクスの有名な著述で、手つ取り早くマルクス経済學の一斑を知るには之に限ると云はれてゐる本である。

▲元來は一八四七年に、マルクスが労働者に向つて講演したもので、出来るだけ平易通俗に説明したと書いてある。然しそれでも可なり六かしい所があり、又言葉の使ひ方の爲に分りにくい所があるので、私の譯文には、多少の増減、變更、註釋がしてある。

▲私の此の譯文を読んで、更に研究的な興味を起した人は、ぜひ河上肇氏の譯をお読みありたし。河上氏のは少々分りにくい所はあるが、嚴密な直譯である。但し私の譯文中にも河上氏のを借用した箇所が多い。

▲河上氏の初めの譯は「社會問題研究」第四冊に載つてゐる。後に修正された分は「賃労働と資本」といふ表題で單行本になつてゐる。

(堺生)

無産社パンフレット

- (1) 社會主義大意……………堺 利彦 (一、二〇)
- (2) 労働と資本……………マルクス (一、五)
- (3) 社會主義と進化論……………パンネコック (一、一〇)
- (4) 利潤の出處……………マルクス (一、一〇)
- (5) 社會主義學說大要……………堺 利彦 (一、三)
- (6) ゴタ綱領批評……………マルクス (一、一〇)
- (7) パリコミューンの話 堺 利彦 (一、一〇)
- (8) ロザの手紙……………ルッセンブルグ (一、一〇)

▲何から讀むべきか？ (一、二) 一

- 水谷長三郎譯 科學的社會主義序論……………(一、六〇)
- 山川 均譯 マルクス學說大系……………(三、五〇)
- 西 雅雄譯 マルクスの生涯と學說……………(一、五〇)
- 河上 肇著 近世經濟思想史論……………(一、五〇)
- 山川 均譯 マルクス經濟學……………(三、八〇)
- 高島素之譯 資本論解説……………(一、〇〇)
- 水谷長三郎譯 通俗資本論……………(三、五〇)
- 參考書——
- 堺 利彦編 社會主義經濟學……………(一、八〇)
- 山川 均著 資本論大綱……………(一、九〇)
- ボグダノフ著 經濟科學十二講……………(二、八〇)
- 河上 肇著 社會組織と社會革命……………(五、〇〇)

この他、社會問題に關する内外書籍の取次をわたくしです。圖書目録「名書たより」は無代贈呈のいたします。(但し郵券二錢封入のこゝ)

東京麹町八ノ二〇 無産社
振替東京二四六二六

大正十一年十月二十三日印刷
大正十一年十月二十五日發行
大正十五年十月十六日版

(價拾五錢)

東京市麴町區麴町八丁目二十番地

編輯發行 堀 眞 柄
印刷人

東京市牛込區鷗卷町四百二十九番地
印刷所 稻葉印刷所

發行所 東京麴町八丁目廿番地 振替東京二四六二六番 無 產 社

終